## ★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。
※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。
※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

# 渦雷　第二話

文／レイラ・アズナブル　イラスト／エーカ

全寮制の高校でルームメイトとして僕（夏木涼）と彼（林野柊）は出会った。高校二年の晩秋、柊（しゅう）は姿を消し、僕は彼が異世界への旅を繰り返す異邦人と知った。

大学卒業のまぎわに、柊との再会を果たし、二年半後、僕達は異世界へと旅立った。繰り返す旅の最後に柊の故郷に着き、その時に彼は死んだ。

その後、柊の故郷で僕は結婚をし、ふたりの子供をもうけた。そして、柊の世界からはじき出される直前に、息子のシュリエが柊と気がついた。柊が捜し求めていた父とは僕だった。

渦雷（からい）　Cyclonic thunderstorm　サイクロン・サンダーストーム。

発達した低気圧や台風などの上昇気流によって生ずる雷。周囲から吹き込む気流が、強い渦状の上昇気流を起こし、そのために渦の中心付

近で発生する。

一年以上旅立ちを遅らせたつけは、僕の体へのダメージとなって跳ね返ってきた。細胞のレベルにまで分解されたように感じ、そのひとつひとつが別々に振動していた。大きな空間の中でかき回され、振り回され、手や足が近づいたり離れたりした。きつく閉じた目の、その目の中でも光が踊り、跳ねた。

何度も薄れる意識の中で、柊の最後の言葉を思い出していた。

『すまない…。でも…ぼくが…いなくなっても…』

『また…あえる…』

『きみは…このせかいで……ぼく……』

『ちち……て…ぼく…は…ん…しん……また…なくて…』

…父に伝えてくれ、僕は半身をみつけた。

いつからだったのだろう。柊が僕を半身と認めてくれていたのは。そしてその先はなにを言いたかったのだろう。

柊と暮らしたあの二年半。温室のような閉ざされた世界。ふたりのコテージ。戻れるものなら、あの世界に戻り、やり直したかった。柊を、僕の半身を救うために。でも、どこから？　何を？　全てがあるべき場所にあった。変える事なんてできない。僕が一番僕だった時代。ふたりして川原で寝てしまった、あの大切な宝石のような時間…。

硬く湿った土の上に投げ出され、着いたと感じたまま気を失った。かすかな鳥の声と、雨上がりの土と木の匂い。木々の葉から僕の顔へとしたたり落ちる水滴で、少しずつ意識を取り戻す。ずきずきする頭と体、そして吐き気。なにより

も心が痛む。愛する者達から遠く引き離される事。
『要らないんだ。どうせ行く時には全部置いて行かなけりゃいけないんだ。何も持ちたくない。いやだ』
『きみはまだ知らないんだよ。僕にとって全てを置いて行くって事がどういう事か』
木漏れ日を見上げながら、動けなかった。初めてわかった。この胸の痛みが、柊にあの言葉達を言わせたのだ。冷えたほほを温かな涙が落ちて行き、僕の耳に溜まる。
違うよ、柊。それでも僕はきみを救いたい。
『要らない』などと、僕には思えない。
閉ざされていたきみの心は、若い僕が開いた。だが、今度はきみの命も救いたい。幼いシュリエは父に言われた言葉を覚えていた。方法があったはずだ。どこかで運命の輪を断ち切れば…。もっと、何かを伝えていれば、柊を救えた。後悔以上の苦痛…。
「兄さん！」
叫ぶ女性の声で、思考がさえぎられた。のろのろと声のしたほうへ顔を向けた。それだけで首や肩が痛んだ。その姿を目で捉える前に、人影が僕の胸の中に飛び込んできた。いつも無防備に僕の胸に飛び込んでくるシュリエを思った。
「兄さんでしょ？　そうでしょ？　帰ってきたのね。名前を言って。言える？　言って！」
「なつき…りょう…」
のどに何かがつまったような、たどたどしい自分の声。
「あぁ、兄さんだわ」
そう言って、また僕の胸にしがみつく。その重みだけで肺が痛んだ。
そんなふうに簡単に信じてはいけない。

妹にそう言おうとして、僕は僕の世界に戻って来た事に気がついた。見慣れた木々。柊と過ごしたコテージの、その山の木々に似ていた。
妹が携帯でよんだ車からは、四十代半ばの男性と中学生ぐらいの少年が降りてくる。妹の家族だろうか。妹の夫と妹の子共なのだろうか。少年は柊に似ている。
あぁ、そうか、柊とはいとこになるのか。妹と柊がどこか似ていたのは、おばと甥だからか…。
眠ったのか、気を失ったのか、記憶はそこで途切れた。

気がついた時に僕が寝かされていたのは、柊とすごしたあのコテージの僕の部屋だった。枕元にはあの頃読んでいた雑誌までがあった。全ては夢か？　だが、雑誌は古びて変色し、時の流れを物語っている。

「気がついた？　兄さん」
妹がベッド脇から声をかける。
「この部屋は？」
「兄さん達が借りていたコテージよ。買ったわ。そして昔のままにしてあるの」
「そんな金…」
「父に買わせたの。なにかあった時には、証拠が必要でしょ？　兄さん達の無実を証明するために。他人に使わせる訳にはいかないって、父を説得したのよ」
「？」
「……結局警察は事故として処理したけれど、どちらかが相手を殺して逃げているっていううわさがあったの」
「！」
考えてもみなかった……。この世界を移動した。その後の事などどうでもよかった。

「…そうか、きみの家族には迷惑をかけたんだね。
きみの父上にあやまっておいてくれないか？
色々と世話になっておきながら、すまなかったと」
「父を許してくれるの？　あなたを引きとらなかった父を」
妹は僕よりもはるかに率直だ。まっすぐに切り込んで来る。
「僕の父の事を知っている？　実の父の事だ」
無言で答える妹。
「知っているんだね？　僕の父の欄が空欄な事を」
うなずく彼女。
「母から何か聞いている？」
「…なにも。問い詰めたけれど。母は死ぬまで、いいえ、死ぬ時が来ても、言わないつもりだわ」

大学コースへ進級する時にそのための書類を集めていて知った。自由と、同時に孤独を感じた。
「きみの父上は、将来大企業をいくつも引き継ぐ身だった。大きなグループ企業のたったひとりの後継者だ。その人が、そんな僕の母を選んだんだ。そこに愛が無かったとは思わないよ」
妹にも言えない言葉を僕は心の中で続けた。
『僕まで受け入れろとは言えない』今ならばそう思う。
だが、おじいが死んで行き場を失った僕の心は、あの時そこで閉じた。そして母の僕への想いはどうなったのだろうか。
「あなたが男だからかしらね…。そう思えるのは。
私は母の苦労をそばで見てきたわ。父の一族に認められるために、母は必死に努力をしたの。

お茶、お花、英会話。社交ダンス。経理の事。経済や、経営の事も。私が小さな頃はいつも家には居なかった。私はさみしかったわ。
中学生になって、ようやく母は私の元に戻ってきたの。そして、ふたりしてモデル学校に行って、ウォーキングの練習をしたのよ。上流階級らしい歩き方を、ね」
妹はかすかに笑った。その笑顔は、やはり柊に似ていた。
「父は母をどこへでも連れて行ったのよ。会社の式典にも、取引先とのパーティーにも。もちろん親戚との数々の付き合いにもね。
その度に母は、進級試験を受ける学生みたいに、気を使い、疲れていたわ。
兄さんの事を知った後、せめて兄さんが母のそばに居たのなら、と思ったの。私も、よ。私も兄さんがそばに居たら。もっと早く兄さんに会っていたら。そう思ったわ。
……私は今でも父が許せないの」
「きみの父上は見せびらかしたかったのさ。自分の力で手に入れた素晴らしい宝石をね。そして、独占したかったたんだ…」
僕だってそうだった。
柊と暮らしていた頃の僕は、彼を守るために彼を隠さなければならなかった。
けれども、コテージで子供のように笑う柊を、僕が作った柊の笑顔を、できる事ならば世界中に見せたかった。そして独占したかった。
「…ありがとう。そんなふうに言ってくれて」
妹がつぶやくように礼を言う。
窓の外には新しい建物が見えた。僕らのコテージよりも大きな、しゃれた二階建ての別荘だった。
庭で男の子が犬と遊んでいる。僕を救うため

に車から降りてきた少年だ。十四・五歳だろうか。妹の息子としたら年齢が合わない。ベッド脇に置かれた新しい新聞を取り、日付を調べた。僕がこの世界を立って二十年以上が過ぎていた。やはり、時がずれている。

妹が、僕よりも年上に感じた。こちらの世界とは五年あるいは六年のずれ。幸運だった。これ以上時がずれたら、僕は自分を証明できなかっただろう。妹が僕に名前を聞いたのは、そのせいだ。僕は若すぎた。

彼女は柊の事を聞かなかった。『なぜ、一緒ではないのか』と。その気づかいが苦しかった。

「待っていて」

そう言って部屋を出て行った彼女は、中に三粒のダイヤの原石が残された小さな袋と柊のノートを持って戻ってきた。

ノートは一ページ一ページ和紙で裏張りされ、綴じ直されていた。

「兄さん達が居なくなってから、何度も読み直したの。

ぼろぼろになってしまって。口の堅い職人さんに頼んだわ。両親にも言ってないから、安心して」

妹の周りにいるプロの集団を思った。だが、昔のように傷つきはしない。

「兄さんがこのノートを私に渡した時に、私は気づくべきだったのよ。兄さんが柊さんと行ってしまうつもりだって事を。後悔したわ。なぜ、もっと前に信じなかったのか。なぜ、兄さんともっと話をしなかったのか。だから、私にできる事はなんでもしておきたかったの…。」

置いていかれる人間の気持ちを、一番知っているはずの僕が、残される妹の気持ちを考えてはいなかった。

僕も同じように後悔をした。自分を責めた。しかし、柊が居なくなって、うろたえた僕がした事といえば、待つ事と探す事だけだった。

妹は強い。女は傷つきやすく、それ故にしなやかで強いという。妻もそうだといい。僕とシュリエの失踪に耐えて、生きて欲しい…。

出て行こうとする妹を呼び止める。

「ありがとう。きみの父上と、僕の母にも伝えてくれ。僕は幸せだった」

振り返った彼女がほほえんだ。輝く彼女の笑顔も、今は僕を傷つけない。

その僕の変化の源には、柊の故郷での経験がある。愛したリュイ。子供達。僕にも素晴らしい家族がある。柊がくれた。だから、僕はもう傷つかない。僕は僕の幸せを、自分自身を信じられる。

祖父が死んだ時に、僕が妹の家族に組み込まれていたら、僕に柊との時間は無かった。きっと僕は自分を見失ったままだった。辛い記憶も全て、それよりも素晴らしい記憶が塗り替えた。僕は幸せだった。そう信じられる。ひとりだと思っていた時も、ひとりではなかった。僕を追うシュリエが居た。

柊。僕の半身。今度こそ、僕が守る番だ。僕がきみを救う。時と世界を越えて僕を、父を追うきみを。

その日のうちに、妹が手配した医師が来た。ただの疲労、衰弱。時間だけが僕を回復させる。年配の医師が、そう診断した。

だが、何日間かは若い医師が僕のために隣の別荘に寝泊りをするという。医師達の肩書きは、彼らを拘束できる父の力を現していた。

夜、ふたりの刑事が僕に会いに来た。早い。まだ一日すら過ぎていない。

妹は「会う必要は無い」と言った。が、僕は会う事にした。

年上の五十代のたたき上げが石田と名乗り、若い、まだ二十代の終わりと思える男が相川と名乗った。

高校時代に現われた柊が、記憶喪失を装ったように、僕もなにも覚えていないと答えた。「知らない」「覚えていない」そう繰り返した。

僕の返事を信じたふりさえせずに、刑事達は帰っていった。

彼らに僕の帰還をリークしたのは何者だろう。おそらく僕のスキャンダルで義父を失脚させられるかもしれないと考えた人間だろう。

だが、ふたりの刑事の行動の源はなんなのだろう。

とっくに時効になった殺人かもしれない僕らの失踪。その事件への刑事としての個人的な関心なのだろうか。おそらくそうだ。上層部の指示ならばこんなふうに僕に会いには来ない。

どちらにしても、僕は慎重に行動しなければならない。

夏が終わり、妹達が街に戻り、それからさらに半年間。僕はコテージで時が過ぎるのを待った。誰もが僕を忘れるまで。そして充分に体力を回復させながら、探り、準備をした。

半年後の春「僕も街に戻る」と妹に告げた。妹が笑いながら、鍵を渡した。僕と柊が借りていた家も、妹は義父に買わせていた。その鍵だった。

彼女はただ強いだけではなく、用意周到だ。僕も、だ。今度は僕も周到に行動する。

「ステキなプレゼントが待っているわ」そう言って妹は笑った。ふたりが過ごしたコテージと家。これ以上の何が、僕に要るというのだろう。

ドアを開けると、僕達の家は、長い間住人が不在だった家独特の匂いがした。テーブルにカバンを置き、ネクタイをはずした。木の床には点々としみが残っている。

母から送られた小切手に僕が不快感をあらわにし、柊がたくさんの酒を買ってきた。そしてふたりでかけあった。笑いながら何回も床を磨いたが、しみはとれなかった。長い間、酒の匂いが残っていた。

空気の入れ替えのために、庭へのガラス戸を開けて息を呑んだ。満開の桜が僕を打った。たくさんの木々と花の群れ。僕達が越してきた時には、雑草の生い茂る荒れた庭だったが、二十年たって花園となっていた。

夢中で庭いじりをしていた柊。木の苗や球根。旅立つ柊が、時をかけて育つ植物を選んで植えていた。そうだ。それはきっと、ひとり取り残されるはずの、僕のためだった。

座り込んだ僕の手や肩に、ふわりと桜の花びらが落ちてきた。僕を抱きしめる柊の手のように。

何枚も何枚も。柊のやさしさが僕を抱きしめる。

教職についた僕に、生徒達がうわさをする。天気予報が雨だと自習にする。そして街を徘徊する。それは、雨の日に死んだ、恋人の幽霊を探すため。

なるほど若さの感性はするどいと思う。だが、少し違っている。雨だけではだめだ。雷がなければ。そして、僕が探しているのは、恋人ではな

い。違う世界から落ちてくる僕の息子だ。徘徊などしない。僕はただベンチに座り待っている。ひとけの無くなった、見晴らしのいい、広い公園で。

僕は柊抜きで二回移動をして、二回とも僕の望む場所の近くに着いた。一度は衰弱し気を失った柊と共に柊の故郷に。一度は僕ひとりで僕らのコテージへ。運もあったろうが、移動する時の意思も到着地の選択に影響があるのだ。

シュリエは、柊として二度僕の近くに現れた。シュリエが無意識に異世界に消えた父を、つまり僕を追っていたからだ。そして、一度目は家族を求める僕の心が、二度目は柊を探す僕の心が、彼を引き寄せた。

ならば、シュリエはもっと何度も僕の世界に着いていたのかもしれない。柊のノートに、柊となって高校生の僕の前に現れる以前に、何度も短い移動を繰り返したと書いてあった。僕がまだ小さな子供の頃の世界に着いた事もあったかもしれない。そして、何もかも知った、これからの僕の世界に着いた事も。その彼を捕まえる事ができたなら、運命は違う道をたどるはずだ。

シュリエは、半分を母の世界に、半分を父の世界に属して産まれた。そして、そのどちらの世界からも異物と認識され排除されているのだ。排除されながら、何度も父の世界にひきつけられ、移動して来るシュリエをみつけ、捕まえるために、僕は待つしかなかった。ここは僕の世界。この世界は僕を吐き出さない…。

シュリエを待つ間、僕は僕にできる全てをした。図書館に通い、医学の知識を身につけた。射撃場に通い、銃のうでを磨いた。そして、買い集めた薬品と分解した銃を腰のポシェットに入

れた。それらは僕達が危険な世界に着いた時にきっと助けになるだろう。
今度こそ、僕はシュリエを、柊を守る。

雷雨がむなしく通り過ぎて行く。遠く雷鳴が響いた。雨は小雨となり、雲が切れ始めた。
僕はいつもの公園でベンチに座り、空間の揺らぎを感じ取るために神経をはりつめ、心の中でシュリエをよんでいた。
『ここへ来い。ここへ落ちて来い』
残る雷雲の存在が、僕の肌の上でかすかなきしみを伝えていた。そのきしみに異質な雑音を感じるのは、僕の期待が見せる幻か?
僕は公園を見渡す。どこからか、かすかな振動が伝わってくる。ベンチから立ち上がり、方向を探る。あえてゆっくりと、細い糸をたぐり寄せるように、歩き始める。遠くは無かった。それよりも、この感覚を見失う事の方が怖い。探りながらゆっくりと歩く。心臓が早鐘のように打っているが、それさえも止められるものなら止めたい。
公園の茂みの一角で、空間が揺らいでいるように見えるのは、雨が目に入っているだけか。違う。
僕は走る。
揺らぎが広がり、中に人影が見える。ひざをつき、両手を地面についている。色が濃くなり、鮮明になり、糸が切れたように、地面に投げ出される。
『可哀想に、無茶な飛び方をしたんだ』
近寄って声をかけようとした僕は、用意した言葉を飲み込んだ。
『シュリエ。僕がきみの父だ。きみの旅は終わった』
心の中で何度も繰り返していた。
しかし、今、目の前で倒れているのは、柊?

高校の時、僕の目の前から消えた彼の、一年か二年後…。そうだ。その可能性があった。『あの世界に戻りたい』僕だってそう思った。柊も思った。『涼の元に戻りたい』

とまどっている僕に気づき、柊が立ち上がり、逃げようとする。反射的に抱きついた。ぬかるみの泥で足がすべる。ふたりして泥の中でもがく。

柊が何かを叫んだ。僕も叫ぶ。

「柊！　僕だ。涼だ！」

つづく